

まず、武満の作品に現れる音型についてふれてみたい。‘ソ・ド(・レ)・ミ’または‘ソ・ミ・上ソ’という上向音型。武満は恐らくこの音型に悲哀とノスタルジーを刷り込まれたのだろうと思われる。実はこの音型は私達にとっても馴染み深い¹。…例えば「この道」は‘ソドレミーミー’で始まる。短調なら「チゴイネルワイゼン」の‘ソドレトミーレー’またはスメタナの「モルダウ」‘ソドーレトミーファソーソー’…。このように‘ソ’から始まる上向音型は昔どこかで聴いた懐かしい響きがあるのであり、武満はこれを様々な曲に使っている。今回のアカペラ作品では「小さな空」「○と△の歌」「MI・YO・TA」「島へ」「翼」の冒頭、「明日ハ晴レカナ曇リカナ」の後奏部分などである。又、他のジャンルでも1983年に日本テレビで放映された倉本聰の脚本による「波の盆」の音楽は抒情的な旋律と響きに溢れ、武満自身により演奏会用の組曲としても編曲されていくつかの録音が残っているがそのテーマも‘ソドミーミファ’で始まる非常に印象的なメロディーである。

もちろん「死んだ男の…」にも曲中で使っており(メロディーの5小節目)、「MI・YO・TA」のような何ともいえない哀愁が表現されている。「死んだ男の…」がベトナム戦争の反戦歌として作られたことは有名だが²、全体に重くて暗い曲の後半部分が長調になることでその長調自体が甘味の塩の如く切なさ暗さを引き立たせるように効いてくるのに気付いているだろうか。切なく苦しい状況をリアルに表現することは容易なことだが逆に何気なくサラリと寧ろ無表情に歌うことで一層悲しみが際立つこともあり、この曲は特に表情は抑えて言葉や調子の転換を巧く利用するなどして本質を歌い伝えたいものである。

ところで、歌詞がそれぞれを表現するときあるものを除いて単一で表しているのに対して次の3つは複数で表している(巻末英詞に注目)ところに興味を示したい。一つは「捻れた足」。片足だけでなく両足ともひん曲がった状態であることに残酷さが倍加する。二つ目はそれに続く「涙」。一筋でなくとめどなく溢れる悲しみを表す。そして三つ目が「また来る明日」。僅かな希望の光を持つ未来が幾重にも重なっている可能性を表わしている。

戦争に対する強い憤りと奥深い悲しみを表しながらも一筋の光をその時代の若者達に託したこの曲の構成はさすがだが、やはりこの歌が「ひとつの‘遠吠え’」で終わらないよう、本質を聴衆に焼き付ける努力を我々歌い手が惜しんではならない。歌詞を覚えメロディーラインに乗せて流れるように歌うのは言うまでもなく、キーとなる言葉が明確に聞こえるようあらゆる表現方法で尽力したい。それはこの曲を歌うことが武満への弔いともなるからである³。

¹ かのレナード・バーンスタインは「ヒット曲がほしければソドレミで始めればよい」と言っている。そして福永先生も1987年の夏合宿で『so do re mi 考察』と題したレクチャーコンサートを企画して下さった。上記の他、メリーウィドウのワルツやティル・オイレンシュペーゲルの愉快ないたずら等があり、先生がアメリカでブルーノ・ワルターの演奏を聴いて涙したというベートーヴェン交響曲第二番、第二楽章の冒頭部分も紹介された。コンサートの最後はブラームス交響曲第一番、四楽章のミレドソと逆に下降するホルンの音型で締め括られている。

² 1965年4月22日東京全電通会館ホール「ベトナムの平和を願う市民の集会」で友竹正則により初演された。近年はカウンターテナーのドミニク・ヴィス、石川セリ、小室等、林美智子をはじめ幅広いジャンルの歌手によりレコーディングされている。混声合唱では自身のアカペラ編曲だけでなく林光のピアノ伴奏付の編曲も広く歌われている。

³ 2010年2月20日は武満没後14年のメモリアル・デイでもある。

(脚注：関)